

京都府北部地域の再発見

—「海の京都」を巡る2022(令和4)年度 「地理学特講」の覚え書き—

香川貴志^{*1}

Rediscovery of Northern Part of Kyoto Prefecture —Memorandum of Geographical Field Trip around of Umi-no-Kyoto in August 2022—

KAGAWA Takashi

抄 録: 本稿は、2022年8月に現地授業を実施した学部開設科目「地理学特講」と教職大学院開設科目「社会科教育実践演習—地理—」の備忘録である。COVID-19が社会問題となる中、本授業科目ならびに姉妹科目である「地理学研究」は宿泊を伴うフィールドワークを中心としているため、2020年度以来、現地授業に発つ直前になって大学から中止や大幅な予定変更を要請され、受け入れ側の現地機関との調整に膨大な時間を要した。そこで本年度は、当初より本学所在地である京都府から出ない対象地域を模索した。こうして選定されたのが京都府観光連盟によって定められた府内4地域のうちの一つ「海の京都」である。本授業科目は当該地域の一部を巡ることで京都府北部地域の理解を深めることを目的としているが、奇しくも本授業科目を筆者が担当してから初めてとなる京都府再発見の授業となった。

キーワード: フィールドワーク, 重要伝統的建造物群保存地区, 丹後半島, 京都府北部地域, 海の京都

I. はじめに

京都教育大学の地理学研究室では、夏季休暇を活用して前期集中開講の現地授業を長年にわたり開講してきた。これは、地理学研究の特徴であるデスクワークとフィールドワーク（以下ではFWと記す）のうち、とくに後者のFWを主軸に据えた授業である。中学校社会科地理的分野や高等学校地理歴史科「地理」（科目としては2022年度以降「地理総合」と「地理探究」）で地域調査が重んじられる一方、教育現場では地理を専門としない教員が往々にして地域調査を嫌悪する傾向があると仄聞する。そこで、こうした意識を少しでも払拭できるように、「地域観察の面白さを実感させる」という目標を掲げて実施されてきたのが本学地理学研究室のFWである。

ただ、2000年頃までは3泊4日や4泊5日で実施したこともあるFWは、セメスター制の導入や総合科学課程（いわゆるゼロ免コース）の廃止、教育実習関係授業の負担増加などで開講科目が整理され結果、現地授業は前泊をともなって3泊3日とするのがほぼ上限となっている。

総合科学課程の廃止や同課程の留年生の卒業後、開講科目数が整理されていく一方で、本学で

^{*1} 京都教育大学

は複数校種の教育職員免許の取得を推奨していることもあり、社会領域専攻の学生の大多数が小学校・中学校社会科・高等学校地理歴史科・同公民科の免許取得を目指している。このことは教員養成系大学・学部のメリットを活用している心掛けとして望ましいことである。しかし、免許取得に必要な開講科目数が限定されているため、積極的な学びの意欲が低いまま「免許を得るのに必要だから」という動機で受講登録する学生が皆無ではない。FWを伴う本授業科目や姉妹科目である「地理学研究」（奇数年開講）に受講意欲にやや難のある学生が登録したことも過去には数例が認められた。

しかし、訪問地域で多くの人びとの手を煩わせるFWで意識の低い学生がいると多大な迷惑をかけかねない。また、学外での授業であるため、注意力が散漫になれば危険が生じることも懸念される。そこで近年では事前学習会において時間と労力を要する文献精読を課しており、これによって学習意欲の高い受講生の確保に努めている。この文献精読は5～10本（年度によって異なる）を読んだ後、各々の文献についてキーワードを選出し文献要旨をまとめるというものである。文献を熟読する経験に乏しい学生たちにとっては相応にハードな課題であるためか、真面目に取り組んでくれる受講生の比率が徐々に高まってきた。

姉妹科目「地理学研究」を含めた過去5年間の訪問地域は、2017年度が三陸被災地（宮古市～仙台市）、2018年度が愛媛県西予市と内子町、2019年度が福島県内の重要伝統的建造物群保存地と会津若松、2020年度が長野県の中山道（妻籠、奈良井、木曾平沢）、2021年度が島根県と山口県（出雲市、大田市、津和野町、萩市）であり、これらは香川（2018、2019、2020、2021、2022）にまとめている。これらのすべてについて、事前学習会で課題とした文献精読結果を筆者が推敲してまとめた文献要旨集を含む小稿があるが、これらの書誌情報については香川（2023a）に譲りたい。

II. 現地授業実施地域の決定から受講生確定まで

本章では、前年度夏季～秋季に行った現地授業実施地域の決定、2021年から2022年にかけての年末年始におけるシラバス執筆、2021年度末から2022年度当初にかけての受講登録と受講生確定までのアウトラインを記す。つまり、本章で扱う内容は、第1回事前学習会に至るまでの本授業科目の助走段階に相当する。

2.1 現地授業実施地域の決定とその背景

例年シラバスの入力が年末年始になっているため、受講希望者が多くなりがちな本授業科目は、現地授業を実施する地域を前年度の秋季には決めておく必要がある。COVID-19の鎮静化が見通せない中で、冒頭の抄録にも記したような中止や大幅な予定変更を要請されるリスクが高いため、今回は早々に京都府内を対象地域に定めた。京都府内の自治体の多くでは、小学校第3学年や第4学年で使われている社会科副読本の最終セクションにおいて府内各地域の概観が扱われ、そこでは丹後半島の天橋立や伊根の舟屋が紹介されている。

こうした府外へは出にくい情勢を反転攻勢の契機と考えると、今回は2021年7月に2022年度の現地授業実施地域を京都府観光連盟が定めた京都北部地域「海の京都」に決め、その1回目の予

備調査を2021年7月20～21日に実施した。その結果を受けて、「海の京都」に属する市町のうちの3市2町（舞鶴市，宮津市，京丹後市，伊根町，与謝野町）でエクステンシブ型のエクスカッションを実施することにした。

2.2 シラバスの執筆

本学のシラバスは，半期で15コマそれぞれの内容や目標を詳細に記す必要があり，到達目標や成績評価基準はもちろんのこと，授業のどのような部分がアクティブラーニングに相当するのかの明記を要するなど，微細な部分まで詳細かつ丁寧な記載を求められる。その入力が可能な時期は前年末から当該年の年初にかけてである。しかしながら，年末年始に5日間ほどシステムメンテナンスのために入力ができないのが通例で，シラバス入力に限られた日数のうちに集中して行わなければならない。これについては，組織として何らかの改善が急務であろう。

本授業科目は，現地授業が集中実施扱いとなる。そこで，筆者は過去のシラバスを参考にして事前にシラバスの予定原稿を作成し，それを微調整しながらシラバス入力に反映している。

今回は現地集合と解散の日程から計算して，現地授業を合計10コマ（第1日目3コマ，第2日目5コマ，第3日目2コマで計20時間），事前学習会を5コマ（3回で計10時間）としてシラバスを作成した。事前学習会の日程は4月23日（土）に2コマ，7月2日（土）に2コマ，8月6日（土）に1コマである。すべて土曜日開催であるのは，本学は教育実習や介護等体験実習，更にこれらの事前指導等でウイークデイの時間割がタイトになっていることによる。

また，本授業科目は現地授業を軸にした内容であることから，あまりに多くの人数で現地を訪問すると公共交通機関の乗降や施設入場の際に支障をきたす恐れがある。そこで，今回は学部の「地理学特講」の定員を20名，大学院（教育学研究科「地理学特論Ⅰ」と連合教職実践研究科「社会科教育実践演習-地理-」）の定員を計5名として，これらの定員をシラバスに明記した。

2.3 受講生の確定

受講生の仮登録が正式な受講登録となるのは，各学生の指導教員による確認作業等があるため，例年4月中旬になる。今年度の場合は，4月18日（月）であり，それは第1回事前学習会の直前といてもよい時期にあたる。

しかし，仮登録に至るまでも多くの調整を要することが多い。その多くは，受講希望学生からの「受講を希望しているが，教務システム上で『定員に達しました』との表示が出て先へ進めない」という相談である。今回もこうした相談が3件寄せられた。他方で大学院の上記2つの研究科の受講希望学生を教務システム上で調べてみると，連合教職実践研究科の1名のみということが判明した。そこで，相談に来た受講希望者には「教務課に依頼して人数制限を一時的に解除してもらうので，受講希望の場合は一両日中に仮登録すること」と口頭やEメールで告げた。

ところが，人数制限を2日間ほど解除している間に受講希望学生が急増してしまい，学部（聴講生を含む）と大学院を合わせた受講希望学生は31名に達した。ただ，仮登録とはいえ受講希望学生を拒絶することは忍びなかったうえ，現地授業が不可能となるほどの人数には達していないと判断して全員の受講を認めた。

こうして今回の受講生が揃った。その内訳を学年や専攻領域，さらに男女別で列記すると，大

学院連合教職実践研究科教科学習探究コース公共・社会プログラム1名（現職教員の男子1名）、学部4回生6名（男子5名＝社会領域専攻4名・体育領域専攻1名、女子1名＝社会領域専攻1名）、学部3回生22名（男子14名＝教育学専攻1名・社会領域専攻11名・理科領域専攻2名、女子8名＝社会領域専攻8名）、学部2回生1名（女子1名＝社会領域専攻1名）、聴講生1名（男子1名）である。

Ⅲ. 事前学習会

前章2節に記したように、本授業科目では3回の事前学習会を設定して2単位30時間の授業時間数を担保した。第1回事前学習会と第2回事前学習会の間を70日と長く設定したのは、文献収集と精読、そしてキーワード選出と文献要旨のまとめ作業に時間を要すると予想されたためである。以下の本章では、各回の事前学習会の内容を述べるが、第1回事前学習会については香川(2023a)で詳述しているので、本稿では概略を記すに留める。

3.1 第1回事前学習会（2022年4月23日（土）、12:00～15:10）

土曜日開催ということもあり、例年通りに「昼食を摂った後に集合して正午開始」という時程（12:00～13:30、13:40～15:10）で実施した。さいわい実施場所は第3回事前学習会まで同一教室（A1教室）を確保できた。

ここでは、受講生が多くなったことを受けて、第1日目に集合した後の与謝野町の重要伝統的建造物群保存地区である「ちりめん街道」の見学、天橋立ビューランドからの地形観察、さらに京都丹後鉄道宮津駅までの行程を借上げ大型バスにすること、第2日目の宮津駅から伊根町の重要伝統的建造物群保存地区である舟屋、経ヶ岬、丹後庁舎、間人集落と漁港、北丹後地震の痕跡である郷村断層を見学・現地討論の後、宮津駅に戻る行程を借上げバスで移動することを説明した。また、COVID-19の感染抑止・防止対策として宿舎をバス・トイレ付きのシングルルームにする必要があることから、宿泊地を西舞鶴駅周辺で確保するべく調整している旨を告げた。また、宮津駅と西舞鶴駅の間は、今回のエクスカージョンにおける重要な要素としての京都丹後鉄道を利用して、第3セクター鉄道の実情を体験できるようにコース設計したことも説明した。

こうした説明に続けて、6月30日の深夜までにキーワード選定と文献要旨を仕上げる担当文献（各自9件）の割り振りを行い、配布した説明用の行程表を参考にしつつ、現地で訪問を楽しみにしているトップ3を小レポートに記してもらった。この小レポートには、受講生各自が担当する文献グループの番号も記してもらい、重複などの間違いの発生を防いだ。

なお、COVID-19ワクチン接種などで第1回事前学習会を欠席した学生については、担当する文献グループを筆者が割り振って本人と面談のうえ、事前学習会での配布資料を渡すとともに重要事項を口頭説明した。

3.2 第2回事前学習会（7月2日（土）、12:00～15:10）

第1回事前学習会で決めた担当文献（受講生一人あたり9本）に基づき、各文献のキーワード選出と文献要旨を6月30日の深夜までに提出してもらい、それをもとに推敲作業を進めた。この作

業は同時に事前学習会の成績評価を兼ねているため、筆者は本授業科目のために多くの時間を割く必要に迫られた。推敲を経た原稿は文献要旨集として簡易製本し、第3回事前学習会までにまとめて配布し、これをもとにした宿題を課すことにした。

第2回事前学習会では、最近の高等学校や大学の入学試験、教員採用試験でも頻出する地形図の読図問題に取り組んでもらった。筆者が地形図読図を重視しているのは、「世界史必修世代」に相当する学部学生、とくに文系の学生が高等学校時代に「地理」を履修していないからである。他方、「地理総合」の必修化により「地理」を担当できる教員が高等学校で切望されている。しかし、採用後の「地理総合」授業で地形図読図ができなければ、授業の質低下を招来しかねない。もちろん、教員採用試験でも地形図読図の出題が増えてくるのが容易に想像できるので、それに対する備え（教員が学生たちの弱点を把握して当該部分の強化を図る）の意味もある。

大学入試センター試験や大学入学共通テスト、さらに各地の教員採用試験における地形図読図問題を精査すると、近年では「地域の変化を地形図から読み解く」要素が濃厚である。加えてこうした出題は、地形や等高線の解読、土地利用や地図記号の把握などのオーセンティックな設問と組み合わせられて、付け焼刃的な学習では対応しにくい「地理的な見方・考え方」を試すような仕上がりになっている。こうした出題傾向を反映して、出題で使用される地形図は同一地域の新旧地形図の組図が多くなってきた。そこで今年度も訪問予定地域の新旧地形図の組図による模擬問題4題を作成した。対象とした地域は、与謝野町加悦、伊根町伊根湾周辺、宮津港周辺、舞鶴市東舞鶴の4地域である。各設問の正答率等は表1にまとめた。なお、本稿では紙幅の制約により、与謝野町加悦に関する模擬問題1とその解答・解説を香川（2023a）に譲っている。

次頁から見開き3組（6頁）にわたって新旧地形図を伴った模擬問題2～模擬問題4を列挙する。模擬問題1を含めて、受講生による解答状況と各選択肢についての解説文を観察すると、模擬問題1と同2ではともに約2/3の者が正解したが、模擬問題3では約1/4の者しか正解できず、模擬問題4に至っては正答率が1割に満たなかった。そこで、模擬問題3と同4で目立った誤答に焦点を当て、最近の学生たちの弱点を表1に基づいて明らかにしておきたい。

まず模擬問題3では、②と答えて誤答となった者が約7割に達する。これは、等高線の判読を苦手とする学生が多いことの証左である。地形図中の三角点や水準点、さらに標高点の数値から等高線の間隔や地形図の縮尺を判断できるので、こうした技法を正しく教えていく必要がある。

表1 地形図読図の模擬問題1～4の解答状況

	①	②	③	④
模擬問題1（与謝野）	21 (67.7%)	5 (16.1%)	0 (0.0%)	5 (16.1%)
模擬問題2（宮津）	1 (3.2%)	9 (29.0%)	1 (3.2%)	20 (64.5%)
模擬問題3（伊根）	2 (6.5%)	21 (67.7%)	8 (25.8%)	0 (0.0%)
模擬問題4（東舞鶴）	3 (9.7%)	14 (45.2%)	12 (38.7%)	2 (6.5%)

資料:受講生31名の地形図読図模擬問題1~4への解答

注) 正解の選択肢には鶯色の網掛を施している。

次に模擬問題4では、②と答えて誤答となった者が全体の半数近くに達し、③と答えて誤った者が約1/4を数えた。誤答②は、比較的新しい地形図記号を用いた「釣り」に回答者が引っ掛かりやすいことを示しているが、後述する解説の通り、地形図記号が設定されていない時代の建物や敷地の形状から推定する能力が試されるケースといえる。他方、誤答③については「埋立て」と「干拓」の相違を理解できていないことが誤りの主因となっている。

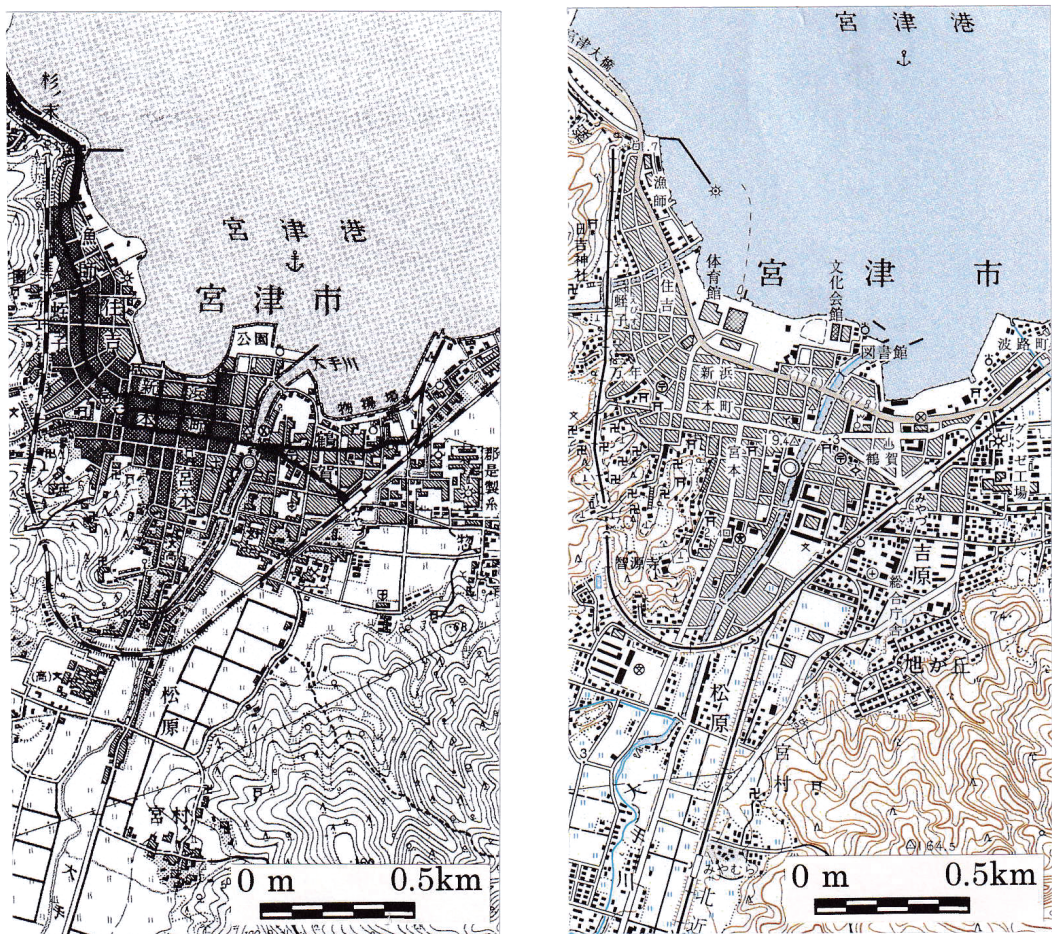


図1 宮津市街地の新旧1/25,000地形図

左(旧図): 1/25,000「宮津」1959年01月30日発行

右(新図): 1/25,000「宮津」2002年10月01日発行

模擬問題 2 (模擬問題 1 は香川 (2023a) に収録) 図 1 に示す宮津港周辺の新旧または片方の地形

図の説明として**適切でないもの**を次の①～④のうちから 1 つ選び、各選択肢の正誤判断理由を①～④すべてについて述べよ。

- ① 宮津港 (宮津湾) では、大手川左岸側の埋立てが右岸側の埋立てより広く進んだ。
- ② 鉄道線よりも北側の宮津市街地にみられた水田は建物が密集する市街地になった。
- ③ 図幅の東端付近の郡是製糸 (グンゼ工場) の南西側の水田では住宅化が進展した。
- ④ 大手川沿いの水田地帯では、山地にはさまれた平地部の中央に鉄道が敷設された。

解説と解答 (模擬問題 2)

この設問は、市街地の読図問題で頻出する新旧比較をベースにしたものである。市街地の地形図読図では、等高線の判読が難しいため、地図記号の有無や移動を活用した正誤判断、海岸線や道路形状の変更を伴う都市改造や都市再開発を問う出題スタイルが多い。この設問の地形図は丹後地域の中心都市として機能する宮津市の中心市街地を含むもので、京都府内でも代表的な港湾の一つである宮津港が描かれている。河川の右岸と左岸がどちらを指すのかについても間違えないようにしたい。

【解説】

- ① 河川は流れる方向が様々なので「どちら側か」を明白にするために右岸と左岸という用語が用いられる。右岸と左岸は、上流から下流 (つまり川が流れる方向) を向いて「どちら側の岸に該当するか」で判断する。京都の鴨川をイメージすると、右岸側の先に右京区、左岸側に左京区が位置するので判断を誤らない。大手川の左岸では文化会館のあたりで海面埋め立てが進んでいる一方、右岸側は殆ど変化が無い。正しい記述なので正解ではない。
- ② 鉄道線 (旧図では国鉄宮津宣, 新図では北近畿タンゴ鉄道 [現・京都丹後鉄道]) は屈曲して山沿いに敷設されていて宮津市街地を囲んでいるが、旧図の大手川右岸にあった水田は新図では密集市街地が変わっている。正しい記述なので、ここでは正解に選べない。
- ③ 旧図では「郡是製糸」、新図では「グンゼ工場」と記された図幅の東端に近い工場は、旧図で工場の南西側に確認できた水田が集合住宅や戸建住宅と思われる建造物で充填されている。これらの一部は、工場から至近であるということから考えると、給与住宅 (いわゆる社宅) である可能性を想定できる。記述内容は正しいため、正解にすることはできない。
- ④ 新図にみられる北近畿タンゴ鉄道 (現・京都丹後鉄道) 宮福線は、大手川の右岸の山際に敷設されていて、決して平地部の中央には位置しておらず、この部分の記述は正しくない。この設問では適切ではないものを選ぶので、この選択肢が正解となる。

【解答】 ④

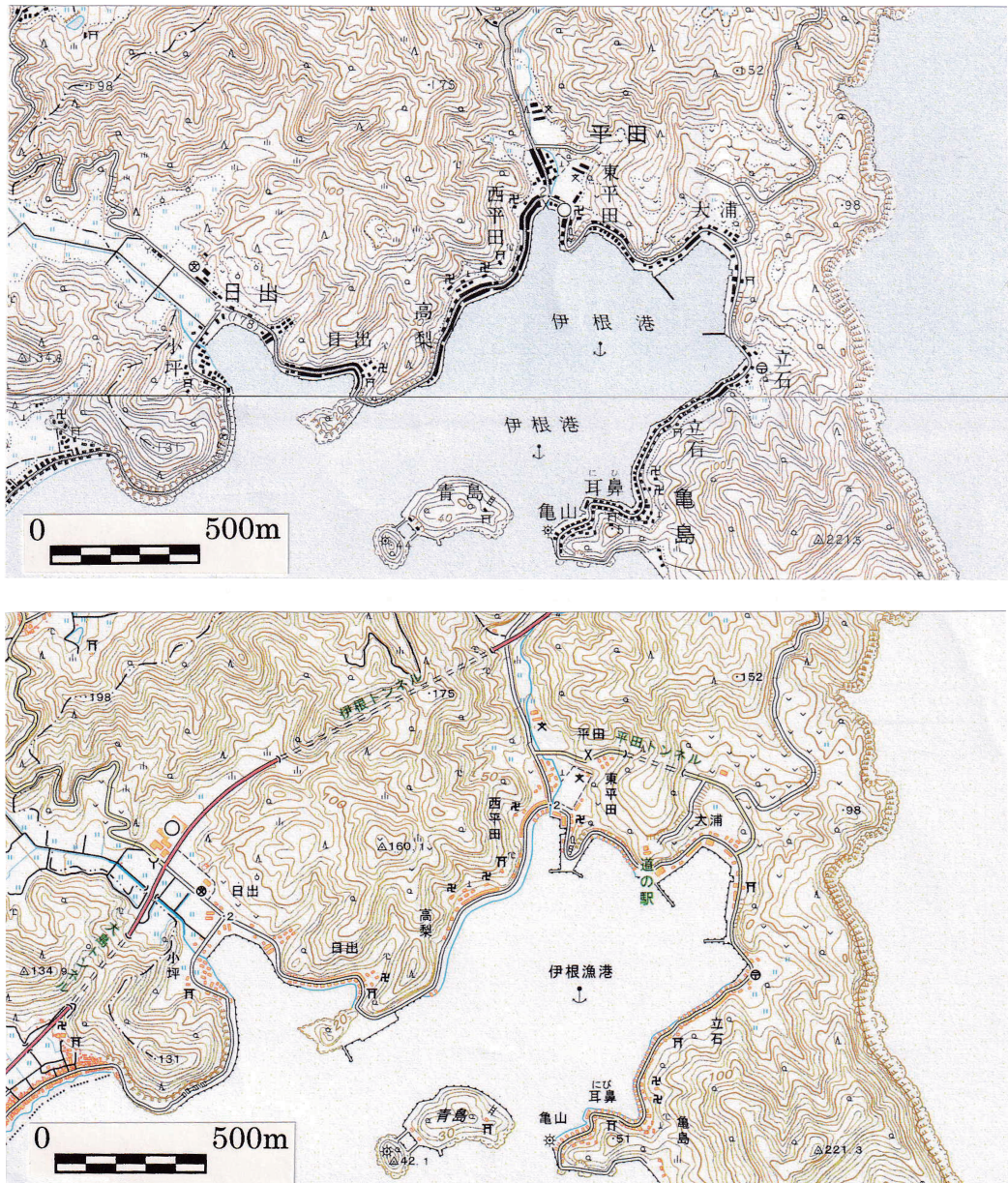


図2 伊根湾周辺の新旧1/25,000地形図

上(旧図): 1/25,000「丹後平田」1987年03月30日発行

同「亀島」1987年01月30日発行

下(新図): 1/25,000「丹後平田」2019年07月01日発行

模擬問題3 図2に示す伊根湾周辺の新旧または片方の地形図の説明として適切でないものを次の①～④のうちから1つ選び、各選択肢の正誤判断理由を①～④すべてについて述べよ。

- ① 若狭湾（図上の右）側にみられる海食崖周辺には旧来より集落が存在しない。
- ② 東平田と大浦との間に設けられた「道の駅」の海拔標高は40～50mである。
- ③ 伊根トンネル西側の国道は田や畑のある谷状の地形のところに建設された。
- ④ 伊根町の役場は東平田西部の学校付近から日出の消防署の北北東へ移転した。

解説と解答（模擬問題3）

京都府北部でひときわ特徴的な集落形態をもつ伊根湾付近を対象として、新旧地形図の比較を多用しつつ、地理的な用語、等高線判読、地域変化、地図記号などを問うた設問である。地形図読図の設問は、このような総合問題的な問い掛けが容易なこと、そして作問できる場所が無限に近いことから近年の高等学校や大学の入学試験、さらに教員採用試験で頻出するようになった。

【解説】

- ① 伊根湾は日本海側にありながら湾口が南側に開いた地形を呈し、これが風待港や漁港として重用される主因となった。この選択肢に記された半島が、湾口の青島とともに防波堤の役割を果たしていることを読み取れる。その半島の若狭湾側は、高さ約50mの海食崖（＝海からの波風で浸食された崖）になっており、平地部が皆無に等しく旧来より集落がみられない。記述内容が正しいため、この選択肢は正解にならない。
- ② 新図で「道の駅」直近の等高線をみると、太い等高線（計曲線）と細い等高線（主曲線）がみられる。周辺の標高点や海面との相対的な関係から、「道の駅」から直近の計曲線が50mで主曲線は40mであることが判明する。記述内容が正しいので、この選択肢は正解にならない。
- ③ 伊根湾に沿った集落内の狭隘路を避けるためにバイパスとして建設された国道は、日出の平地部から北東に伸びる谷筋に沿って伊根トンネルに至っている。この間の土地利用を観察すると、田と荒れ地の記号は確認できるが畑の記号は無い。したがって、選択肢の内容で「田や畑」の箇所が部分的に誤っている。つまり、この選択肢が正解となる。
- ④ 旧図で東平田西部の学校の南側にあった役場は、新図では同じ場所で確認できない。役場が無くなるケースは、その大部分が市町村合併が行われた場合か移転した場合に生じる。伊根町はいわゆる「平成の大合併」で市町村合併を経験していないため、ここでは役場の移転を想定するのが穏当である。そこで役場の移転先を新図で探してみると、日出の国道付近にある消防署の北北東にあることがわかる。正しい記述なので正解にはならない。

【解答】③

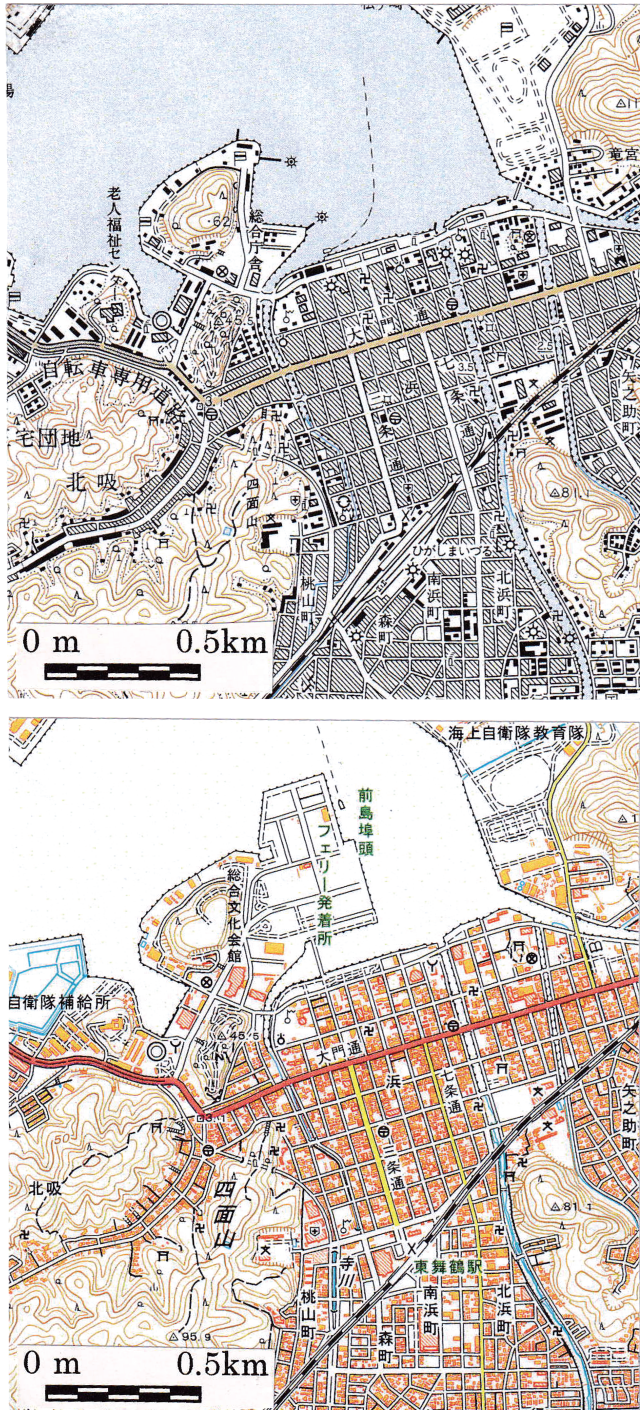


図3 舞鶴市東舞鶴の新旧1/25,000地形図

上(旧図): 1/25,000「東舞鶴」1984年11月30日発行

下(新図): 1/25,000「東舞鶴」2020年10月01日発行

模擬問題 4 図3に示す東舞鶴の新旧または片方の地形図の説明として適切なものを次の①～④のうちから1つ選び、各選択肢の正誤判断理由を①～④すべてについて述べよ。

- ① 東舞鶴駅が高架化されて駅周辺地域は区画整理された。
- ② 新図の東端に近い河川の左岸側に図書館が新設された。
- ③ 海上自衛隊教育隊の対岸に干拓でフェリー発着所が建設された。
- ④ 海上自衛隊補給所の敷地は拡張されず広さを保っている。

解説と解答（模擬問題4）

模擬問題1に続けて市街地の新旧地形図の比較を通じて解答を導出する典型的な出題形式の設問である。ここでは海岸線の変化だけでなく、地形図記号に関する問いかけも混ぜて選択肢を設計した。軽率な判断で「釣り」に引っかからないようにしたい。前問とは異なり、適切な記述を探す設問なので、3つの選択肢の説明文にはどこか誤りがあり、正しい説明文の選択肢は1つだけということになる。

【解説】

- ① 東舞鶴駅付近のJR線をみると、旧図では駅構内に側線（引き込み線）が多数みられるのに対し、新図にはそれが無い。さらに新図では路線の両側に沿って細い実線が描かれており、東舞鶴駅周辺が高架になっていることがわかる。駅構内の側線があった場所や周辺市街地では、道路拡幅や広場の造成、さらに市街地の区画変更などもなされており、高架化と併せて区画整理が施行されたことを読み取れる。正しい記述なので、これが正解となる。
- ② 新図の東端に近い河川の左岸側には、開いた書籍を図案化した図書館の地図記号がみられるが、旧図の同じ位置には正方形に近い形状の建造物が描かれており、これが図書館である可能性を捨てきれない。なぜなら、旧図が作成された時期には図書館の地図記号が設定されていなかったからである。こうした可能性がある限り「図書館が新設された」と断言するのは早計である。よってこの選択肢は正解として選べない。図書館の地図記号は、2002（平成14）年以降に発行された1/25,000地形図に博物館（美術館を含み水族館を含まない）の地図記号とともに採用された。その後、2006（平成18）年に老人ホーム、2019（令和元）年に自然災害伝承碑の地図記号が追加設定された。国土地理院のWebサイトで調べてみよう。
- ③ 海上自衛隊教育隊の対岸にフェリー発着所があるのは確かであるが、港湾地区は水深が深いことが必要条件であり、ましてや北海道航路の大型フェリーが発着する埠頭を干拓で建設するのは理に適っていない。干拓は遠浅の干潟的な場所を堤防で囲んで内側の水を抜いて干し上げて陸地化し、客土等で農地造成を図る開拓技法で、日本では八郎潟、児島湾、諫早湾などが著名である。この選択肢の「干拓」の箇所は明らかに不適切な記述であり、正解に選ぶことはできない。
- ④ 海上自衛隊補給所は舞鶴市役所（◎）の北西側にあるが、旧図で老人福祉センターと記載されている西側の水面が新図では埋め立てられており敷地拡張を確認できる。したがって「拡張されていない」という記述の箇所は誤りで、この選択肢は正解にはならない。

【解答】①

IV. 現地授業

一昨年度以来、宿泊を伴う「地理学特講」（偶数年）と「地理学研究」（奇数年）の慣例通りに本年度も現地授業2週間前からの健康管理を徹底した。結果、直前に発熱して検査の結果で陽性反応を示した1名、教員採用試験の二次試験と実施日程が重複した2名が現地授業に参加できなかった。これらの学生については、感染拡大が深刻化したときに備えて準備しておいた代替課題で現地授業に参加したとみなして成績評価した。代替課題はGoogle社のStreet Viewを用いた町並み観察や地域活性化の提案等からなり、以下の本章に記す全ての訪問地区をカバーしている。現地授業に参加した受講生は、学部学生28名と大学院生1名である。また、今回の現地授業には卒業生の井上明日香氏（神奈川県立希望ヶ丘高等学校教諭）が帯同参加してくれた。

4.1 第1日目（2022年8月17日（水）、曇り時々雨、宮津の最高気温28.4℃・16:40）

本誌には紙幅の制約があるので、本章の各節では行程に関する記録を記した。各々の下車地点での行動を【 】にまとめ、個々の地点での行動詳細については割愛した。

9:50 与謝野駅（集合）10:05（借上げバス）10:20 加悦庁舎【「ちりめん街道の重要伝統的建造物群保存地区や加悦庁舎を自由見学】10:30（借上げバス）10:40 与謝野駅《遅刻学生4名が合流》10:45（借上げバス）12:05 天橋立駐車場【天橋立ビューランドにて砂州と砂嘴の地形を説明、自由昼食】13:15（借上げバス【車中で宮津市街地の構造と港湾付近の再開発について説明】）13:25 宮津駅【駅周辺の市街地を自由観察の後、宮津駅で再集合】14:25（京都丹後鉄道）15:00 西舞鶴駅【駅前の宿舎でチェックイン、遅刻学生1名と合流】西舞鶴駅前15:35（借上げバス）16:00 舞鶴引揚記念館【学芸員による講義と館内自由見学】17:00（借上げバス）17:30 五老スカイタワー【リアス海岸の説明と観察】18:00（借上げバス）18:30 西舞鶴駅前

4.2 第2日目（2022年8月18日9:15（木）、晴時々曇り時々雨、間人の最高気温27.9℃・17:00）

8:50 宿舎ロビー集合 / 西舞鶴駅前9:15（借上げバス【車中で地方都市周辺部の土地利用の特徴、及び京都北部地域の交通体系の変化、丹後半島山間地域の廃村化について説明】）10:20 日出棧橋10:30（伊根湾めぐり観光船【船上から舟屋を観察】）11:00 日出棧橋11:10（借上げバス）11:15 伊根集落【重要伝統的建造物群保存地区や漁港を説明・見学】11:50（借上げバス）11:55 道の駅「舟屋の里」【伊根集落を俯瞰、自由昼食】13:10（借上げバス）13:45 経ヶ岬【現地見学と説明】14:05（借上げバス）14:30 丹後庁舎【引率者の資料収集とトイレ休憩】14:35（借上げバス）14:40 間人展望台【伊根集落と間人集落の建物構造の相違を説明】14:55（借上げバス）15:05 琴引浜なき砂文化館【学芸員による「なき砂」と海洋汚染の説明】15:45（借上げバス）16:05 郷村断層【自身のメカニズムと断層について説明】16:20（借上げバス）17:30 西舞鶴駅前

4.3 第3日目（2022年8月19日（金）、晴、舞鶴の最高気温32.4℃・13:00）

8:30 宿舎ロビー集合 8:50（徒歩）9:00 田辺譲跡【田辺城についての簡単な説明と自由見学】9:30（徒歩）9:40 西舞鶴駅9:55（路線バス増発便）10:15 市役所前10:20（徒歩）10:30 赤えんが博物館【管内自由見学】11:00（徒歩）11:05 遊覧船棧橋11:15（舞鶴みなと巡り遊覧船【船上から東舞鶴港を見学】）11:45 棧橋上陸後に解散式

V. 作業課題と評価—むすびに代えて—

前章の行程で現地授業を実施し、3日間の毎日課題を与え、それを事前学習での取組とあわせて総合的に成績評価した。なお、事前学習の成果をまとめた「文献要旨集」は第3回事前学習会で配布して、各訪問地区ごとに「自身が担当していない文献のうち、最も読んでみたい文献を挙げ、その理由を記す」という宿題を与え、それを第1日目のチェックイン時に回収した。これにより、現地に関する事前知識を補強することが出来る。

今回の現地授業には、教員採用試験（二次試験）やCOVID-19の陽性反応により参加できなかった学生が2名いた。彼らには、全ての訪問地点についてのストリートビューを活用したバーチャルフィールドワークを課し、現地授業の参加に代えた。

第1日目の課題は次の2点である。(1)第1日目の訪問地のうちから最も印象に残った地域を挙げて選択理由を記す。(2)与謝野町の「ちりめん街道」を一層魅力的な観光地にするための提案とそのキーワード3点を記す。印象に残った地域としては、天橋立ビューランドと五老スカイタワーの両者が拮抗して大部分を占めた。課題(1)については「ちりめん街道」訪問時には小雨が降っており、加悦鉄道記念館が定休日であったなどの悪条件もあったようだ。一方で天橋立の景観は、地図帳や府内各自治体の小学校社会科副読本で頻繁に取り上げられているため、実物を見ることができた感動が大きかったようである。また、五老スカイタワーについては、雨上がりの涼しい気温のもとで舞鶴湾のリアス海岸が強い印象を与えていた。五老スカイタワーの印象の強さは、後述する3日目の課題(表2)で当地を読んだ句が5～6句あったことから傍証される。課題(2)については、景観に調和する地図や案内板の拡充、駐車場の増設、観光客が金銭を使うような飲食店の充実、現地案内ボランティアの確保などが挙げられた。キーワードについては、これらの提案と呼応したものであった。

第2日目の課題も2点を課した。具体は次のとおりである。(1)第2日目の訪問地のうちから最も印象に残った地域を挙げて選択理由を記す。(2)広域自治体としての京丹後市の長短所を各々1点ずつ指摘し、短所を改善するための提案を記す。第2日目の(1)は、大部分が伊根の舟屋集落を挙げた。これも府内の各自治体による小学校社会科副読本の保母「全てで取り上げられている特徴ある景観である。選択理由も「独特のインパクトある景観」というものが大多数だった。が、そこを訪問している観光客の多さを指摘した意見も少なからず認められた。(2)については、事前学習を経て完成させた論文要旨集により、大部分の受講生が先進的な公共交通システムを熟知していたためか、移動手段の確保が長所として多く指摘された。また、借上げバスで現地を移動中、ドライバーが狭い道での路線バスとの離合についての無線連絡をしていた様子が印象に残っていたことも考えられる。(2)では「地域のまとまりに欠ける」や「広域ゆへの行政コストの高さ」などが指摘された。その改善策としてICT活用による在宅での諸手続きの推進を挙げた者が7名おり、コロナ禍での経験から柔軟な発想が育ちつつあることを実感した。

第3日目は、朝の集合時に第1日目と第2日目の課題を集めた。当日は1限と2限相当の授業実施であり正午前の解散だったので、第3日目課題はEメールによって当日深夜までの送信提出ということにした。課題は重くなり過ぎないように配慮して、ここ数年の受講生から公表を博している「最終日の訪問地で俳句を詠む」にした。そして、集まった句を句集(表2)にして、「自分の句を除いてベストだと感じる句を1点選ぶ」という課題を翌日以降に与えた。ただし、俳句を正しく評価できる腕が筆者には備わっていないので、第3日目の課題は評価対象から除外した。

表2 舞鶴を詠んだ俳句の句集

番号	詠まれた句 (引率者を含めて1句/人)*注	番号	詠まれた句 (引率者を含めて1句/人)*注
1	海照りを 返す軍艦 残暑かな	17	潮焼けと 笑顔が似合う 自衛隊
2	絶景だ 夕立模様の 五老岳	18	懐かしむ 故郷の片陰 トーキョーダモイ
3	波静か 軍艦並ぶ 夏の海	19	炎天下 涼風通る 赤レンガ
4	蒸し暑さ 日差しに負けぬ 赤れんが	20	光差す 北の暑き日 赤煉瓦
5	夏の海 水面に映る 軍の色	21	涼風や 明治匂ふる 赤煉瓦
6	暑き日を 輝き照らす 赤レンガ	22	天高し 歴史積み遺す 軍港か
7	夏の海 海の生き方 それぞれに	23	青い空 燃ゆる太陽 赤レンガ
8	青緑 涼風漂う リアス式	24	夏の波 寄す我が心 リアス式
9	誰しもが 帰り迎えた 夏の海	25	夏の海 海の守り人 ゆらゆらと
10	盆休み 歴史語るは 赤れんが	26	陽にやける 赤れんが見る 遊覧船
11	見渡せば わたしを吸い込む 青嶺かな	27	避暑巡航 頬と煉瓦を 染む汽笛
12	炎昼の 水面に映る 赤煉瓦	28	鎮守府の 新涼の風 感じたり
13	舞鶴湾 知らせてくれる 夏の風	29	秋麗 紺碧振り向き 朱股色
14	スカイタワー 天使の梯子と 青き嶺	30	鯛雲 海の蒼さと 赤煉瓦
15	海軍に 手を振り満ちる 炎昼や	31	五老岳 汗の引く風 晩夏かな
16	青嵐 見送る人と 赤レンガ	32	岸壁の 母を偲びて 夏カレー

(受講生及び引率者が詠んだ第3日目の課題による)

*注 現地授業を欠席した者は画像データ利用で対応

舞鶴を詠んだ句では、港湾地区を象徴する「赤れんが（赤煉瓦，赤レンガ）が多く盛り込まれており、舞鶴の歴史的景観が多くの受講生の心に残ったことを読み取れる。表2の俳句は詠み人を匿名化しているが、32番の句は筆者が詠んだものである。

最後に成績評価について記す。学部開講科目「地理学特講」の受講生30名についての成績算出は、GPA評価の基準を満たすよう、第1段階で絶対評価、第2段階で相対評価を行った。また、こうした成績評価方法をとることは事前に受講生へ伝えておいた。他方、大学院開講科目「社会科教育実践演習-地理」の受講生は1名だったため、成績評価の匿名性を担保するために、以下では学部と大学院をわせた成績評価の分布を記す。

成績評価の分布は、秀:3名(9.7%)、優:8名(25.8%)、良:13名(41.9%)、可:7名(22.6%)である。不可(不合格者)は0名だった。

COVID-19蔓延してから既に3回目の実施となった今回は、宿舎にシングルルームを使うことにも慣れたが、こうした設備の無い離島や農山村での授業実施は困難を極めたままの状況が続いている。巡ったばかりのフィールドの話で盛り上がりながら食事を楽しめる日の再来を強く期待したい。

謝辞

本研究ならびに香川(2023a, 2023b)を執筆するにあたり、2021年夏に実施した予備調査で

京都府丹後教育局総括指導主事の安達佳代子氏に大変お世話になりました。また、現地授業に際しては、京都丹後鉄道、丹後海陸交通、京都交通、伊根湾めぐり観光船、海軍ゆかりの港めぐり遊覧船の各交通機関の皆様、舞鶴引揚記念館の皆様、琴引浜なき砂文化館の皆様、宿泊先の舞鶴グランドホテルの皆様から格別なご高配をいただきました。以上の方々にに対し、末筆ながら厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献（対象地域に関する文献は別稿（香川：2023a, 2023b）を参照）

- 香川貴志（2018）「三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ—岩手県宮古市から宮城県仙台市に至る2017（平成29）年度「地理学研究」の覚え書き—」、『京都教育大学教育実践研究紀要』, **18**, pp. 1-10.
- 香川貴志（2019）重要伝統的建造物保存地区でのフィールドワーク—愛媛県西予市卯之町と内子町を対象とした京都教育大学における授業実践—, 『新地理』, **67**(2), pp. 20-30.
- 香川貴志（2020）地理学の視点で巡る「極上の会津」——2019（令和元）年度「地理学研究」の覚え書き—, 『京都教育大学環境教育研究年報』, **28**, pp. 37-51.
- 香川貴志（2021）COVID-19 拡大抑止の環境下におけるフィールドワークの実践—中山道妻籠宿、奈良井宿、木曾平沢における2020（令和2）年「地理学特講」の実施とその工夫—, 『京都教育大学環境教育研究年報』, **29**, pp. 13-28.
- 香川貴志（2022）COVID-19 拡大抑止に熟慮したフィールドトリップの実践—出雲大社、石見銀山、萩、津和野を巡る2021（令和3）年度「地理学研究」の覚え書き—, 『京都教育大学環境教育研究年報』, **30**, pp. 87-102.
- 香川貴志（2023a）「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第1報）—丹後半島全般、京都丹後鉄道、与謝野町—, 『京都教育大学環境教育研究年報』, **31**, pp. 39-53.
- 香川貴志（2023b）「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第2報）—宮津市、伊根町、京丹後市、舞鶴市—, 『京都教育大学環境教育研究年報』, **31**, pp. 55-69.
- 坂口慶治（2022）『廃村の研究—山地集落消滅の機構と要因—』海青社.
- 世古春香・武田一郎（2019）砂州と砂嘴の用語の混乱, 『京都教育大学環境教育研究年報』, **27**, pp. 1-11.
- 武田一郎（2007）砂州地形に関する用語と湾口砂州の形成プロセス, 『京都教育大学紀要』, **111**, pp. 79-89.
- 武田一郎・世古春香（2019）湾口砂州と砂嘴の違い, 『京都教育大学紀要』, **134**, pp. 65-78.
- 野間晴雄・香川貴志・土平 博・山田周二・河角龍典・小原文明（2017）『第2版 ジオ・パル NEO—地理学・地域調査便利帖—』海青社.